

Title	5-2 幼児の日本語終助詞と他者信念理解能力の発達(XI.共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	府川, 未来
Citation	霊長類研究所年報 (2007), 37: 117-117
Issue Date	2007-07-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/166423">http://hdl.handle.net/2433/166423</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

していたが、発現強度はカニクイザルに比べ、弱かった。また HLA-G については絨毛外トロホプラストに非常に弱く発現していたが、カニクイザル胎盤にみられた絨毛合体性トロホプラストにおける発現は確認できなかった。これらの原因として、ヒトとニホンザルにおける HLA-G, HLA-F 相同性が、カニクイザルと比べ低い可能性が考えられる。またサル種間でも HLA-G, HLA-F 相同分子の発現、機能が異なっている可能性がある。このことについては今後は、検体数を増やすと共に、さらに多種のサルについて調べる必要がある。

### 5-1 ニホンザルはどのようなときにコンタクト・コールを発するのか

菅谷和沙（神戸学院大・院・人間文化）

対応者：杉浦秀樹

宮城県金華山島と鹿児島県屋久島に生息するニホンザルのオトナメスを対象に、毛づくろいの頻度と、毛づくろいの前のコンタクト・コールの有無を調べ、比較した。2006 年 7 月から 9 月に金華山島の A 群と B<sub>1</sub> 群、2007 年 1 月から 3 月に屋久島の Kawahara-Z 群と Nina-A-1 群をそれぞれ調査した。各群れから高順位、中順位、低順位のオトナメスを 2 頭ずつ選び、1 個体につき 10 時間ずつ、個体追跡法を用いて観察した。特に 2m 以上離れていた個体が接近後に始めた毛づくろいに注目し、交代して行われた場合には、2 回目以降の毛づくろいは分析から除外した。

調査の結果、毛づくろいの頻度は、金華山群では約 0.6 回/時、屋久島群では約 1.1 回/時で、屋久島の方が高いことが明らかになった。毛づくろい前の発声率は、金華山群では約 56%、屋久島群では約 30%で、金華山の方が高かった。

金華山群と屋久島群の間で毛づくろい頻度と毛づくろい前の発声率が異なるのには、個体の凝集性が関係していると考えられる。金華山群は、屋久島群よりも個体密度が低く、採食パッチ間の距離が長い (Yamagiwa et al, 1998)。つまり金華山群の方が屋久島群よりも凝集性が低い。そのため、毛づくろい相手が近くにいることが比較的少なく、発声によって相手を呼び寄せたり、相手に近づくことを知らせたりする必要があるだろう。一方、屋久島群は金華山群よりも凝集性が高いため、発声によって相手を呼び寄せたり、相手に近づくことを知らせたりする必要がないだろう。

本研究により、ニホンザルは毛づくろい前の発声によって、毛づくろいの依頼や許容を伝えている可能性があることが示唆された。

今後は、どのような個体間で発声がみられたか、発声の有無によって毛づくろいの拒否の割合が異なるかについて分析を進め、毛づくろい前の発声の機能を明らかにしたい。

### 5-2 幼児の日本語終助詞と他者信念理解能力の発達

府川未来(国際基督教大・教育)

対応者：松井智子

他者信念理解の発達指標である誤信念課題では自らの顕著な知識（真実）を抑制し、推論的に理解された他者の（誤）信念を基に質問に答えることが要求されており、抑制機能の発達が問われるといえる。通常、健常児においては 4 歳から 5 歳でこうした課題に成功するようになるといわれている。本研究では、誤信念課題において異なる言語使用や自己の知識状態がどのように他者信念の理解を促すかが検証された。

実験 1 では従来の誤信念課題に加え、登場人物が明示的に自らの誤信念を発話するような発話付の誤信念課題を 3 歳児に課した。誤信念発話は終助詞「よね」を使用したものと終助詞なし言い切り形の二つを比較した。終助詞「よね」の使用が話者の発話命題への心的態度（モダリティ）を表現し誤信念がより明示的に示されることで、他者信念がより顕著になると考えられ、「よね」課題において正答率があがることが予測された。実験 2 では更に自己知識の抑制を促すため、物体が移動された後の知識（物体が何処に移動されたか）を実験的に操作した。結果、3 歳児の誤信念理解のためには、自己の知識状態の変化のみではなく、発話により誤信念が明示的に示される必要があった。子供は会話において、他者の視点を特に終助詞を使用して言語的にやり取りすることで、他者信念理解を深めることが分かり、発達における言語使用の重要性が示唆された。

### 5-3 母子の絵本読み場面における母親の心的状態語の使用について

初海真理子（国際基督教大・教育）

対応者：松井智子

本研究では、母子会話場面において母親は感情、認知状態を表す心的語彙の機能や用いられる文脈の複雑さを、子供の心的語彙産出レベルに合わせ調節していると仮定し検証を行った。

2 歳 3 ヶ月から 4 歳 5 ヶ月児 51 名とその母親、計 102 名を対象とした。母子には文字のない絵本を見て、絵について自由に会話をする課題が与えられた。会話の中で得られた心的語彙は 語彙の種類（感情状態語、認